

特集 JBパリ展主催者挨拶



尾州クオリティの一端を披瀝

長尾大八郎副委員長挨拶



本日のレセプションにお越し頂きましたファッション関係の皆様、ジャーナリストの皆様、関係者の皆様、JB(ジョイント・尾州)パリ展示会と本日のレセプションにご来場頂き、心よりお礼申し上げます。

私はここで、皆様に尾州産地の歴史と概要を説明させていただきます。

尾州産地は日本のほぼ中央にあります。3月に開催される愛知万博を契機に建設されました中部国際空港からは1時間たらずのロケーションにあります。行政区域は愛知県と一部岐阜県を含みますが、この地帯は日本でも代表的な美しい河川・木曾川の流域でありまして、肥沃な土地と美しい自然に恵まれています。

尾州産地は日本の都が奈良に決められた710年頃から、織物業が盛んでした。最初に手掛けた素材は麻でしたが、次ぎに絹織物の生産が盛んになりました。日本の古典にはこの地域は一面の桑畑の緑で覆われていたと記述されています。

時代が移り、時の支配者の「庶民に絹は贅沢」という方針で、この地における絹織物の生産は衰退しましたが、開発意欲旺盛な尾州の人々は1500年代初頭に日本に栽培手法が伝わった綿花の生産と織物作りに乗り出しました。尾州地方は秋になると綿花の白い花で埋め尽くされました。

綿織物で隆盛を誇った尾州産地を1891年、大地震が襲いました。液状化現象が発

生し、砂土が表面に露出し、綿花の栽培が不可能になったのです。しかし、開発意欲旺盛な尾州産地の人々は、次に毛織物の開発に着手しました。時の政府が官営の毛織物工場を建設したのは1879年でしたが、尾州産地でも大震災以降、毛織物の生産が盛んになり、1900年初頭からはそれまでの「きもの」に代わって洋服生地生産にも旺盛に取り組みました。もちろん、現在は100%梳毛や紡毛の洋服地の生産であります。

このように尾州産地は100年余の毛織物の伝統を誇る産地なのです。幾多の歴史の試練を乗り越えて、今日を迎えておりますが、1895年のプラザ合意による円高を契機に毛製品輸入の増大が続き、産地規模を縮小させているもの事実です。

その対策としまして尾州産地は素材開発面では輸入製品と競合しない付加価値の高い素材の開発 日本が誇る先端技術の織物への付与による高度機能素材の開発 1300年の歴史を持つ日本独自の織物技法の今日への再現素材 竹や和紙など新素材を駆使した素材などに取り組んでいます。また政策面ではこうしたジャパン・クオリティの輸出に力を入れております。今回パリにお伺いしたのもその一環であります。

ジャパン・クオリティの一端を今回持参しております。どうぞルーヴル美術館展示場でご覧下さい。皆様との出会いを感謝しております。尾州素材と皆様の出会いが、新しいビジネス創造にお役にたつと信じております。